

- 自然のすばらしさに感動できる人でありたい
- 郷土をもっと好きになろう

# 郷土の子どもたち

# あなたたちは、まちの宝

## 地震の後の津波

志摩半島から熊野に続く海岸線に多くみられるリアス式海岸の地形は、湾が深く入り組み複雑な海岸線を形作って風光明媚ですが、一度大地震が起きると大津波の発生が予想されます。

1944（昭和19）年に発生した東南海地震（M7.9）は、熊野灘沿岸の村々にも甚大な被害をもたらしました。熊野市二木島町に住んでいる古老は、「大地震で広場に避難して海をみると、海面がどんどん退き始めほとんど水がなくなり、海底が見えるほどになった。次に海底が天ぷら油を煮立てているようになった。大人の人が「津波が来た！」と叫んだ。一気に波が逆流し10m近い津波が押し寄せ、漁船や家屋を押し流し根こそぎ持っていった。その時、多くの人命も失われ、町は廃墟と化した」と話してくれました。そのため、この地方では、津波の恐ろしさについて、人から人、親から子へと言い伝えられており、津波に対する備えも万全です。

しかし、東南海地震から50年以上経過した今日、地震に対する警戒心が薄れてきているのも事実で、三重県に住む私たちは地震に対する対策をしっかりと取り、いざという時に備えなければなりません。



東南海地震津波到達地点碑

## 学習のめあて

東南海地震の規模は、マグニチュード7.9で、1923（大正12）年に発生した関東大地震とほぼ同じでした。震源は、和歌山県新宮市付近で、断層の破壊は北東に進み、浜名湖付近まで達したといわれています。この地震により大津波が発生し、高いところでは、2階建ての住宅をはるかに越えてしまうほどでした。津波による被害は甚大で、特に志摩半島から和歌山にかけての海岸部で大きくなりました。

東南海地震津波到達地点碑には森本福太郎さんの名が刻まれています。森本さんは地震発生直後に、荒坂国民学校（今の荒坂小学校）に向かいました。学校では、津波が来ることに気づいていない子どもたちが、下校のために集まっているところでした。森本さんは、玄関まで駆け付けると、「津波が来る。子どもを逃がせ！」と、辺りにとどろく大声で叫びました。このおかげで、子どもたちは高台へ避難し、多くの命が救われたのでした。

津波が迫る中、とっさに学校へ向かい、郷土の子どもたちを救おうとした森本さんの思いについて考えてみましょう。

## 考えてみよう

- 1 地震が起きた後、海はどのようなようになったのでしょうか。
  - 2 森本さんは、どのような気持ちで人々や子どもたちを避難させたのでしょうか。
  - 3 森本さんの行動について考えてみましょう。
  - 4 東南海地震津波到達地点碑（森本福太郎翁顕彰碑）は、どのような目的で建てられたのでしょうか。
  - 5 東南海地震津波到達地点碑（森本福太郎翁顕彰碑）には、二木島町の人々のどのような思いが込められているのでしょうか。
  - 6 森本さんのように、郷土を愛し、郷土を救った人物について調べ、その生き方について考え、話し合みましょう。
  - 7 地震が起こった時、どのような行動をとればよいのか、考えてみましょう。
- ☆ 第1部の「ここが私のふるさと（P120～123）」を活用し、自分たちも地域社会の一員であることについて考えてみましょう。

## 福太郎じいさんの叫び

しばらくして、海水の流れが速すぎるとか、潮の退いた岸壁の跡や、海が濁っているなどを見た漁師の福太郎じいさんは、異常を察知したのでしょうか。はしけの舳先から、先ほどよりいっそう高い声で、「津波というものが来るかわからん。高い所へ逃げよ！」と叫んだのでした。

そう言い終わると、すぐに船べりをスルスルと通って、真っ先に船着きに駆け上がり、高台へ向かう人々とは逆の方向へ駆け出しました。

福太郎じいさんが向かったのは、荒坂国民学校（今の荒坂小学校）でした。学校では、子どもたちは下校のために運動場や玄関に集まり始めていました。じいさんは、玄関まで駆け付けると、

「津波が来る。子どもを逃がせ！」

と、辺りにとどろく大音声でしらせたのでした。

当時5年生と6年生だった人は、その声や、福太郎じいさんの様子を克明に覚えていました。股引に手ぬぐいの捻りはちまきという、漁師姿であったということです。

当時、荒坂国民学校は高等科2年まであり、8学級350人の大きな学校でした。福太郎じいさんが駆け付けなかったら、すでに下校ずみの1、2年生を除いた300人の生命は、失われるところでした。



【注】学校沿革史によると、昭和19年の児童数は350人とあります。当時は1、2年が午後は休みで、地震のあった時刻には、すでに帰宅していました。したがって、学校に残っていたのは、3年生から6年生と、高等科1年及び2年で、300人はいたと考えられます。

ところで、校舎が津波で流されているのに「学校沿革史」が残っているのは、このとき、先生方が必死の思いで学校の重要な文書などを避難させてくれていたからです。

出典：「津波が来る、子どもを逃がせ！」（鈴木美文）

東南海地震津波到達地点碑<sup>ひ</sup>

熊野市二木島町にある、東南海地震津波到達地点碑（森本福太郎翁顕彰碑）には、次のように記されています。

「昭和十九年十二月七日昼、未曾有の大津波が旧荒坂村を襲った。東南海地震大津波である。このとき、荒坂国民学校児童生徒三百人余は津波の襲来を知らぬまま、今、まさに下校にかからんとしていた。その危急を救ったのが森本福太郎翁である。翁は、自らの危険を顧みず、学校に急行すると、大音声で『津波が来る、子どもを逃がせ。』と叫び、三百人余の子どもたちを直ちに高台へ避難させた。この碑は翁の尊い働きを顕彰し、後世に語り伝えていくため、二木島町民の意志によって建立するものである。※奥地政吉さん他数名も駆け付けた。」



現在の二木島湾と二木島町

「津波が来る、子どもを逃がせ！」（鈴木美文）、ほかから作成